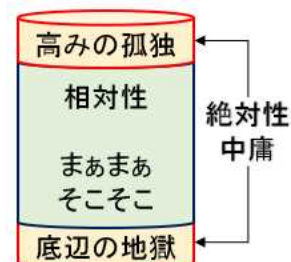
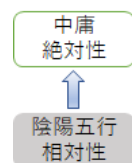


先月は般若心経を通して、空に関して考察した。空とは人生の全ては移り変わり、固定的で普遍的なものは存在しないという事であった。いわゆる諸行無常の世界観である。ただしこの空思想はしばしば厭世主義と間違われることがある。辞書を借りれば、厭世主義とは「この世の中では、幸福や満足を得られず、積極的な価値は認めがたいとする人生観。また、そのような人生観に基づく哲学上の立場。ペシミズム（物事の成り行きを悪い方向にばかり考えやすい悲観主義）。」と記されている。ペシミズムの反対が楽観主義でオプチズムと云う。私見ではあるが、空思想はどちらかと云えばオプチズムに近いのではないかと思う。全ての事象は移り変わる。普遍的で固定的な事象は存在しない。と云うことは、信じる信じない、損得、有利不利さえ存在しない事になる。完全不完全も正解不正解も無い。二極化する相対性の世界で私たちは生きているが、元来は絶対的な存在であり、善い意味で何でもありの世界となる。その意味で空思想は、対立を生まない、良い意味で何でもありの、非常に楽観的な思想なのだと感じざるを得ない。世の中には科学で証明されたことしか信じない、基本的に他人は信じない、目に見えないものは受け取らないという思想の方々も多い。それが良い悪いではなく、実際に多数、存在していっしょに。目に見えないものを信じる信じないは、どちらでもいいが、目に見えるものしか信じられないと、損か得か、有利か不利かで、現実生活やビジネスを捉えがちになる。二極の世界観で物事を眺めることになる。いわゆる陰陽論である。陰陽五行論は言い切っているが、最終目的は中庸の世界を生きる事である。ただし、すぐには中庸を生きれないので、力量が身に付くまでは、陰陽と五行の理論で物事を捉えなさいとメッセージしている。陰陽論、つまり相対性の世界の中で物事を捉えたと損得が生じ、有利不利が生じる。この二極の両極端を体験すると初めて中庸の立ち位置が見えるという理屈である。最初はどこが中庸なのか分からない。多少の力量が身に付くと、たぶん、こちら辺が中庸だろうと推測は出来るようになるが、今度はそれを維持し続ける事が難しい。だから力量を身に付けるまでは、損得勘定で物事を観なさい、両極端に人生を振り切りなさい、そのプロセスが中庸を教えてくれると伝えているのだ。この陰陽論、つまり相対性の世界で生きると、私と他者が存在し、他者（社会）からの評価が気になり、信じる信じないの立場に立ち、傷付く傷付かない、価値がある価値が無い、有利不利と云った世界観が表出する。その根本原因は自分のものの見方、つまり今この瞬間の在り方である。その体験が嫌なのであれば、今この瞬間の在り方をシフトさせればいいのだ。中庸の世界、つまり絶対的な存在として在れば、自分も他者も存在しない。他者が存在しないから、私を傷付ける存在も存在しないし、価値が有る無いも存在しない、損得も無い、ただある状態が存在しているだけだと理解できる。そんな世界観が広がっていく。歴代の名僧たちは、この中庸の世界を見た人たちではないかと思う事がある。特別なことが分かったり、啓示が下りて来たのではなく、相対的な世界から、絶対的な世界に在り方をシフトさせただけなのではないかと思う。それは誰でも出来ることである。しかし、慣れ親しんだ相対的な世界から抜け出すのは、容易ではない事も事実である。今までの生き方、在り方を変えるのは、本当に難しい。習慣化されているからだ。師より、こんな言葉を頂いたことがある。人が習慣化された生き方・在り方を変えるのは、大きく3つの機会に触れたときである。1つは自分が死ぬ手前までいき、生き残ったとき。2つは自分の愛する者を亡くしたとき。3つは人生で地獄を味わい、積極的に心から変わろうと思ったとき。この3つのどれかに触れたときに、人は初めて自分の自我を手放し、他者の意見を心から傾聴し、在り方を変えるものだ。つまり、まあまあそこそこの人生を歩んでいる最中は、人は習慣化された在り方を変えようとしな。圧倒的に成功して権力を持ち、人の高みに登り孤独を得るか、圧倒的にド底辺に叩き落され地獄を味わうしか、人は変わりようがないのだとおっしゃった事を鮮明に覚えている。変わろうとしないのは、変わらなくても生きていけるくらいの、ぬるま湯人生を歩んでいるからだ。ド底辺に落ちたとき、またはトップに君臨し重責を担ったとき、人は自我を握りしめる生き方から、シフトせざるを得なくなるのだと、仰った。



空思想に話を戻そう。空は中庸を説き、絶対的な世界観で物事を観よ、とメッセージしている。換言すると世の中の全ての事象は移り変わり固定的なものは一つも存在しない。それは厭世主義ではなく、良い意味で何でもありだと「受け入れる」事が出来る、積極的なものの見方であると考察してきた。全ての事象は移り変わるからこそ、変化を受け入れ、その時点で与えられた環境や状況を肯定的に味わうことこそ、全てが満たされることであると換言できる。逆に自我、自分の正しさ、自分の思い通りにしたいとエゴを突き出したときに、それは満たされることが無いので、いつまでも心は満たされない。自分のエゴを滅し、「今これを味わえという事ですね」と受け入れる心を持った瞬間に、自分の思い通りにしたいことが無くなるので、心が満たされるという世界観である。理屈ではご理解頂けると思うが、現実生活に適応できるかどうかである。師のお言葉をお借りすると、まあまあそこそこ人生を歩んでいると、ある程度、自分の思い通りになると勘違いする事も出来るので、この世界観を受け入れる動機があがらないだろう。両極端に立っている者は、有無を言わず、自我の押し通る世界に居ないので、この世界観を傾聴していく可能性が出てくるだろう。現実生活を本気で空世界から眺め出すと、まったく違う風景に見えてくるはずだ。すると損得、有利不利、価値が有る無いという相対的なものの見方から、ただ在るという絶対的なものの見方にシフトし出していく。見えている風景が違うのだ。空が実践できると、およそ人生で抱えている課題が、課題でなくなってくるはずだ。

ある僧侶が般若心経の空について、次のように言及している。般若心経は、捉われの元となる一切の実体と思考の否定を中心とした「空」の悟りを拠り所とし、般若すわなち智慧の目覚めを説いている。「仏法の大海は、信を能入となし智を態度となす」と云われる様に、信じるという清浄無垢な心をもって、はじめて仏教の教えに接することができ、知恵に依ってその教えを知り、悟りの道に到達できる。

信じる事。相対的な世界で生きていくと、信じることは難しい在り方である。信じると裏切られるからである。換言すると、信じる信じないの世界を超越して生きていけと説いているのだ。では如何にして、このものの見方を身に付けられればいいのか。それは非常に簡単で、誰でも出来る事である。運を引き寄せればいいのだ。陽転者は口を揃えて「運が良かっただけだ」と云う傾向がある。陽転者は運が良い。たまたま運が向いたという事を「棚から牡丹餅」とも表現するが、それには、牡丹餅が落ちてくる場所まで行く努力が必要である。それが運を引き寄せる在り方である。運を引き寄せる具体的な方法は、日常生活の日々の積み重ねの結果、運を引き寄せるのだ。特効薬はない。勉強や業務や筋トレと同じ。面白くなるまではつまらない。凡人は面白くなる前に辞めてしまう。面白くなるまで積み重ねることが、運を引き寄せる事なのだ。勉強も業務も筋トレも基礎の積み重ね。ゲームが好きな人であれば、主人公がボスキャラを倒すまでは、地道なロールプレイの積み重ねが必要なはずだ。道が開くまで、面白くなるまで、基礎の積み重ねを積み上げるしか、運を引き寄せられないのだ。面白くなるまでは、愚痴や不平不満を吐いてはいけないのだ。面白くなるまでのプロセスが面白いことは、面白くなってからでしか理解できないのだ。

この相対的な世界から、絶対的な世界に移行した時、「長所と短所」と云う価値も大きくシフトしていく。「短所＝欠点＝欠けている」という概念が、「欠けていると捉えている部分＝自分の特徴、長所である」と変化するのだ。私たちは、不完全な状態(欠けている状態)で生まれ、不完全な状態で死ぬ。その不完全さに気が付いて、不完全さを埋めようと努力して生きている事が多い。つまり不完全ではダメだと勘違いしてしまうのだ。不完全なままでいいのだ。劇作家の寺山修司は次のような言葉を残している。

「人間は不完全な死体として生まれ、何十年かして、完全な死体となるのだ。人生の暗い部分を見ない人間には、その深さは分からない。私の存在そのものが質問なのだ。その答えを知りたくて生きてるんだ。」人間は元来、欠けている存在であり、その欠けている部分が個性になる。欠けている部分を埋めたら、その個体の個性が無くなるではないか。欠けていていいのだ。欠けている事こそ、個性であり、今世の役割の起因となるのだ。だから人間は地獄を味わったとき、とことん、欠けている自分を突き付けられ、初めて自分の生きている意味を知るのだ。または実力以上の地位に立った時、自分の力量の無さをとことん突き付けられ、その高みの領域で欠けている自分を突き付けられ、謙虚にならざるを得ないのだ。

劇作家の寺山修司は次のような言葉も残している。

「悪口においては、常に言われている方が主役であり、言っている方が脇役であるという宿命がある。」
陽転者は一般社会通念で云う欠点を埋めることなく受け入れ、磨きをかけたからこそ、長所として輝き出し、他者から必要とされる存在になった人を云うのではないだろうか。そんな一例を挙げる。一休宗純は名僧として名を残しているが、彼はおよそ破天荒な人生を歩んだことで有名である。酒を飲み妻帯し、愛人もいた。しかしそれは悟りを得た後の言動であり、悟りを得るまでは、苦悩しながら真面目に修行に励んでいた。そんな破天荒な彼が、悟りを得たプロセスを考察してみよう。

京都の大徳寺の高僧、華叟宗曇(かそうそうどん)の弟子となる。『洞山三頓棒』という禅の公案に対し、「有漏路(うろち)より無漏路(むろち)へ帰る 一休み 雨ふらば降れ 風ふかば吹け」と答えたことから、華叟より一休の道号を授かる。なお「有漏路(うろち)」とは迷い(煩惱)の世界、「無漏路(むろち)」とは悟りの世界を指す。ここで『洞山三頓棒』の公案の詳細をみてみよう。

洞山(とうざん)という僧侶が、長い旅の末、やっと雲門禪師の所にたどり着き、入門を乞うた時のこと。雲門に「どこから来たのか」と問われて、洞山は「査渡(さと)より」と答えた。すると「昨夏はどこで過ごしたか」と重ねて問われ、「湖南の報慈(ほうず)に」と答えた。更に「そこを出立したのは、いつか」と問われて「8月25日」と答えた。すると、雲門は「汝に三頓の棒を放(ゆる)す」と叱責する。「一頓」は20発なので「三頓」で60発を棒で殴るというのだ。「棒で殴ってやりたいところだが、今日はこらえておいてやろう」と痛烈な言葉を投げ掛けた。正直に答えたのに「棒で殴られる」とはいったいどういうことか。洞山は、何かなんだか、さっぱりわからない。一晚苦しみ、悩み考えても解けない。そこで翌日、また雲門の所へ行き、「私のどこが間違っていたのでしょうか」と問うと、雲門は、「禅の盛んなこの地を廻りながら、この無駄飯喰いが!」と大喝した。そこで洞山は大悟した。という公案である。

「洞山は正直に答えたのに、どうして雲門に殴られなければならなかったか」というのが命題である。また洞山は「無駄飯喰い」と云われて、何をどう悟ったのか。一休もこの命題に取り組み、長い月日、悩み苦しんでいた。ある時、平家琵琶の『祇王と仏御前』の条を聞き、一晚泣き明かして、ようやく解けたのだという。さて一休は、何をどう悟ったのか。この公案に対して一休は「有漏路(うろち)より無漏路(むろち)へ帰る 一休み 雨ふらば降れ 風ふかば吹け」と答えた。その意図は何か。みなさんは、どう考えるだろうか。



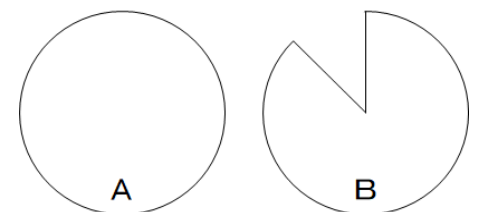
別の観点で紐解いてみよう。情熱大陸に二人の若者が特集されていた。共に先天的に障害を持っている。これまでの表現をすると、共に欠けている存在である。その二人の紹介文を記載しておこう。1人は2019年6月2日放送分で、ドローンパイロットの高梨智樹氏である。1998年神奈川県生まれ。18歳の時に父親と共にドローン専門会社「スカイジョブ」を設立。空撮機体からレース機、産業用機体まで様々なドローンを使いこなす他、警察への講演会や新型ドローン開発のテストパイロット、また災害時の情報収集活動への協力など活躍は多岐に渡る。現在21歳。国内でも数少ないドローンで生計を立てている職業パイロットだ。幼いころから身体が弱く、ディスレクシア(識字障害)を抱えているため、自宅に引きこもりがちだった高梨。当時の自分を「友達が少ない方だしスクールカースト最下層だった」と振り返るが、中学生の時に動画サイトにアップされていたドローンの迫力映像に衝撃を受けてその魅力に没頭し、以降急速に才能を開花させて行く。人と関わるのも苦手だったが、意を決して16歳でレースに初出場し、レース歴わずか半年で国内大会に優勝し日本代表に。ドバイで開催された国際大会への出場を皮切りに様々なレースで注目を集める存在に成長した。番組では、行政や名だたる企業、テレビ局からの依頼に応じて様々なシーンで活躍する高梨に1年間かけて密着。「ドローンが無かったらまだ引きこもっていたかな」と恥ずかしそうに微笑む“元ひきこもり”の青年が秘めた、大空への熱い思いと無限大の可能性に迫る。もう1人は2019年5月5日放送分で、書家の金澤翔子氏。1985年東京生まれ。34歳。母の影響で5歳から書道を始め、学生時代には数多くの賞を受賞。20歳で開いた初個展が評判を呼び、その後、伊勢

神宮や建仁寺を始めとした名だたる神社やお寺への奉納、大河ドラマの題字など、幅広い活躍を続けてきた。さらにその勢いは国内に留まらず、ニューヨーク、チェコ、シンガポール等で個展を開き、世界中から称賛を集めている。ダウン症であり、その筆から生み出される書には、他にないエネルギーが溢れ出ており、その力強さに涙する人も少なくない。母の泰子さんは言う。「翔子はただみんなに喜んでほしいという思いだけで書きます。そんな純粋な魂が、見る人の胸を打ったのかもしれませんが」。番組では彼女の“書”が放つ不思議なエネルギーの源泉を探ろうと密着取材を開始。「みんなにパワーをあげたい」が口癖の彼女の書は、なぜこんなにも見る人の心を揺さぶるパワーが宿っているのだろうか。新時代に渾身の一筆を捧げる金澤翔子の“今”を追った。というのが番組 HP に記載されている紹介文である。

二人に共通するのは、一般的に云う「欠けている存在」であるという事だ。ダウン症、引きこもり、身体が弱い、ディスレクシア(識字障害)、カースト最下層、いじめにあう、成果を出せない、良い評価を得れない。。。でもその欠けている部分が、今の輝きを放っている彼らの源泉になっているのではないか。欠けていると思いついて入っている部分は、その個人の特徴であり、長所であり、本来の自分になる為の起因であり、生きている証となり、生きる原動力になっているのではないか。そのように捉えることも出来るとしたら、欠けているは悪いことであり、直さないといけない事なのだろうか。空思想の観点から観ると、欠けている事自体でバランスが取れていて、その欠けている部分が自分を導いてくれる。欠けている、上手くいっていない、そんな状況の中にこそ、人生の答えがあるのではないだろうか。だから欠けている部分から、目を背けてはいけないのだ。上手くいかない状態から逃げてはいけないのだ。虚しく、悲しく、喪失感に駆られ、怒りに苛まれ、絶望的な状況の中にこそ、本当の答えがあるのだから。

そんな上手くいかない自分を見つめて、名を馳せた偉人は多い。例えば、正岡子規である。明治時代を代表する文学者の一人であった正岡子規は、死を迎えるまでの約7年間は結核を患っていた。「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」の名句は、療養生活の世話や奈良旅行を工面してくれた夏目漱石作「鐘つけば銀杏ちるなり建長寺」への返礼句である。正岡子規は「悟りとは平気で死ぬ事ではなく、平気で生きる事である」と心境を述べている。どんな存在であろうと、寺山修司の言葉を借りれば、不完全な存在なのだ。

つまり欠けているのだ。欠けている部分の無い存在は存在しない。その自他の欠けている部分を如何に受け入れ、目を背けずに磨いていくかで、陽転するかしないかが決まるのではないか。欠けている部分は目立ってしまう。その欠けている部分が、肯定的な輝きを放つようになるまで、基礎の反復練習を如何に積み上げていくかが大切なのではないだろうか。



欠けていることへの認識が変わると、今見えている世界が変わってくるはずである。この欠けている部分は、陽転していく事の起因となると考えることが出来る。すると生きている意味、生き甲斐が感じられてくるはずである。その生き甲斐が、仕事で成果を創り出すこと、つまり人のお役に立つことに結び付いている。人のお役に立っているとき、はじめて生きているという実感を得ることが出来る。人のお役に立つお役目を頂く機会を体験する事が、自分が生きている実感を味わい、自分の生き甲斐に直結していく。欠けている自分の領域を見つめると、痛みを伴うこともあるだろう。しかしそのプロセスは、他者が抱えている痛みを理解する練習にもなる。自他の痛みが理解できている者は、他者の感情を理解できるので、他者に寄り添うことが出来る。その寄り添ってもらえた者は、理解された、味方になってもらったと感じる。秘伝書の中には、次のような格言がある。「人生の生きる目的は他者から喜ばれる存在になる事」、また「人生とは、出会う人すべてを味方につける事」とある。自他の欠けている領域を受容し、今この瞬間をただただ在るからこそ、人生が陽転していくのだ。欠けていることは、豊かなのだ。。。